

本共同研究の目的は、再分配を可能にする多様な手続きに注目しながら人類学における再分配研究を再活性化することにある。これまでに4回の研究会を実施し、総計12名のすべてのメンバーによって報告がなされた。それに加えて、2015年1月24日に開催された第103回現代人類学研究会「特集——再分配」（於東京大学）と、2015年5月30日・31日に開催された日本文化人類学会第49回研究大会における分科会「再分配研究の再始動——行為から集団の生成を考える」の2つの研究会を館外で組織した。これらの活動の成果を、(1)新しい再分配論の方向性、(2)制度が具体化される場面、(3)行為としての手続きが生み出すものの3つに分けて総括し、紹介する。

再分配論の発展可能性

本誌145号で述べたように、本研究は、(1)具体的な手続きの効果と(2)再分配と集団の関係の2つに注目することを掲げて開始した。共同研究を進めるなかで、それらに加えて以下の2つの方向性が提示された。

「ポランニー再考——ポスト社会主義の再分配論に向けて」と題された西垣有（関西大学）による報告では、再分配の定式化が示されたポランニーの論文「制度化された過程としての経済」の丁寧な再読を通じて、互酬、再分配、市場という3つの統合形式を相互に排他的なものとしてではなく、ある特定の制度化された経済を構成する3つの要素として捉えることではじめて、人間の経済を記述することが可能になると

いう重要な指摘がなされた。

「メラネシア人類学における再分配『批判』——『集団』と『戦争』をめぐる覚え書き」と題された里見龍樹（日本学術振興会）による報告では、メラネシアにおける儀礼的交換に注目することで、中心と集団を所与とするポランニーの図式と類似しつつも異なる、「再分配のような」多様な実践があることが示された。同時に、サーリンズの著作の再読を通じて、これら「再分配のようなもの」を、フーコー的な権力論と結びつけて論じる方向性が打ち出された。

当初掲げていた2つの方向性に加えて、(3)人間の経済を互酬、再分配、市場という3つの統合形式の組み合わせとして描いていく、(4)「再分配のようなもの」をフーコーの権力論と結びつけることで集団内部の関係に焦点を当てる、という2つの方向性をつけ加えることができたことは、本共同研究の重要な成果である。

制度が具体化される場面

近代国家の枠組みのなかでは、再分配は明示的に定式化された制度として行われる。ここでの制度は、何をどのように集めて配るのかについての一連のマニュアルとして想定することができる。制度がひとたび制定されると、現場ではこの制度に沿って、あるいはそれから逸脱しながら具体的な手続きが行われるようになる。制度は現場レベルで行われる様々な手続きの前提となるが、同時に、制度はそれらの手続きを通じて実演されるものでもある。

高橋絵里香（千葉大学）がつねに問題にするのは、制度が具体的な手続きのなかでどのように実演されているのかである。高橋によると、いくら文章化されていても、マニュアルにはいくつもの隙間が存在しており、具体的に運用していく際には、かならず現場レベルでの判断が求められるという。フィンランドの高齢者福祉を対象とする複数の報告において、家族介護の利用のされ方や施設への入居者の決定といった具体的な手続きに注目することで、高橋は誰によってどのような決定がなされ、そこにどのような論理と倫理が介在しているのかを描き出してきた。

一方で、「日本型福祉制度の陥穽——沖縄の高齢者地域福祉を事例に」と題された報告において加賀谷真梨（国立民族学博物館）が目にしたのは、再分配制度のひとつである介護保険制度の導入が人間関係をどのよ



沖縄のある離島では2013年4月より小規模多機能型居宅介護サービスの提供が開始された。写真は、小学生が施設を訪れ利用者と交流している様子（2014年9月24日、施設職員撮影）。

うに再編してきたのかである。沖縄のある離島における高齢者福祉は、全国社会福祉協議会主催のサークル的なデイサービスから、島民による週5回のデイサービスと配食サービスを提供する高齢者共同生活施設の導入、さらに介護保険法にのっとった小規模多機能型施設への移行と変化してきた。これらの制度的な変更は、高齢者及び介護に携わる住民の「福祉」の見方や求め方、家族への介入の度合いなどを変化させながら、離島における人間関係を再編するものであるという。

田口陽子（日本学術振興会）による「インドの『市民的』モラルと再分配——『社会的なもの』批判の比較を通して」と題された報告では、インドの留保制度に焦点を当てながら再分配と集団の関係や「社会的なもの」と「政治的のもの」の関係が、欧米とは異なる形で展開してきたことが明らかにされた。その上で新中間層による反汚職運動を取り上げることで、現代インドにおける新自由主義と「政治的のもの」、「社会的なもの」が互いにどのような関係にあるのか、その見取り図が示された。

久保忠行（大妻女子大学）は、「レイシズムとしての難民問題と『再分配の手続き』」と題された発表において、タイの難民キャンプから日本へ再定住した難民が経済的な貢献を求められる一方で、いかに当事者が必要とする支援から排除されてきたのかを詳細に報告した。この報告は、日本の難民政策の問題点を鋭く指摘するものであると同時に、私たちが参与している日本における再分配が、いかに弱者を排除することによって成立しているのかを照らし出すものである。それはまた、田口の議論と同様、里見の指摘する再分配の権力論を異なる文脈において描き出すものでもあった。

「所得の再分配とスティグマ——ブラジルにおける『ボウサ・ファミリア』の受給をめぐる」と題された報告で、高橋慶介（一橋大学）は、ブラジルで実施されている条件つき現金給付の歴史と制度的特徴を丹念に説明した上で、それがたんに格差是正に貢献しているだけでなく、受給者に実施主体である国家の存在を想起させるものであり、この意味で国家と人びとの関係を再編するものであることを鮮やかに描き出した。

手続きが生み出すもの

制度が具体的な手続きの前提の一部を構成するのと同様、個々の手続きもまた、序列や連帯や集団性の前提の一部を構成し、それらを可視化する機会を提供し、それらを生み出す基盤となる。この意味で、序列や連帯や集団性は、手続きに先立って存在する固定的なものというよりは、人びとの行う手続きのなかで立ち現れ、変容するものである。

河野正治（日本学術振興会）による「儀礼的再分配にみる価値の創造と流通——ミクロネシア連邦ポーンペイの位階称号を事例として」と題された報告はこのことを示す好例である。



ポーンペイの儀礼的再分配では、分配の順序とともに受け渡し方によって序列が示される。写真は、焼かれたブタとパン果を、ココヤシの葉の籠で包装したもの（2011年9月、村の祭宴にて、河野正治撮影）。

河野が詳細に論じる儀礼的再分配では、称号の位階序列にのっとった分配が原則とされながらも、位階秩序から逸脱することや、分配の順番をめぐる葛藤が起こることがままあるという。そこでは、「知事」や「牧師」といった称号以外の役職が称号に優先したり、旅立ちや誕生日といった状況に応じた論理が分配の順番を変える可能性をほらみながらも、そうした原則から外れる分配によって逆説的に位階序列の存在が可視化される。

友松夕香（日本学術振興会）は、ガーナ北部のダゴンバのラッカセイの収穫や家計についての精緻なデータと分析をもって議論を組み立ててきた。友松によると、ダゴンバでは畑の主だけでなく近隣の女性や子供たちがラッカセイの収穫を手伝い、各人が収穫した量に応じて分配がなされている。この収穫量に基づく分配からは、一般的な賃金相場と比べてかなり多くの分配を受けることができ、畑の主である男性たちから女性たちへの集合的な富の移転としての側面を持っているという。友松の報告は、西垣の提唱する互酬、再分配、市場の3つの統合形式の組み合わせとしての経済を描くという方法を、具体的な事例に基づいて実践したものでもある。

伊東未来（日本学術振興会）は、「再分配としての季節労働——マリ共和国ジェンネにおける都市市民の収穫労働を事例に」と題された報告で、マリ共和国ジェンネの都市市民が行うヘージェイと呼ばれる農村への出稼ぎ的な収穫労働に焦点を当てた。このヘージェイを通して、ジェンネの都市市民は不足しがちな食料をまかなうことができ、他方でヘージェイを受け入れる農耕民はジェンネでの商業に役立つ人間関係やそこを通じてのイスラームの人的ネットワークを更新しているという。

「奉仕を滑り込ませるつながり——バリ島慣習村における祭祀と労働」と題された吉田ゆかり（日本学術振興会）の報告では、アヤーと呼ばれる寺への奉仕活動に焦点が当てられた。一方で、村の成員にとって、アヤーは義務と同時に村でのつながり方を形づくる手段となっている。他方で、村の外部からやってくる芸能家にとっては、独特の形式で謝礼を受け取ることでアヤーに奉仕の意味合いをもたせ、村と親密な関係を築いたり、タクスーと呼ばれる霊的な魅力を獲得していることなどが指摘された。

このように、本共同研究では人類学的な再分配論を再始動させるべく、理論的な研究と事例分析の両方を順調に積み重ねてきている。今後は、個々の議論を深めることで、成果出版の準備を整えていく予定である。

はまだあきのり

国立民族学博物館機関研究員。専門は医療人類学、アフリカ地域研究。ガーナ南部のカカオ農村地帯を対象に生権力と統治について研究を行っている。著書に『薬剤と健康保険の人類学——ガーナ南部における生物医療をめぐる』（風響社2015年）、論文に「書き換えの干渉——文脈作成としての政策、適応、ミステリ」（『一橋社会科学』2015年）など多数。